笑顔を取り戻すために「小さな学校」の挑戦

― 大阪精神医療センター分教室の紹介 ―

大阪精神医療センター分教室

1　大阪精神医療センター分教室

(1) 分教室の概要

大阪府枚方市にあり、大阪またはその近隣府県の精神医療を支える基幹病院である大阪精神医療センターに併設された本分教室には、小学生が 8～20 名、中学生は 7～17 名が在籍しています。令和 4 年度は小中学生合わせて 100 名の在籍があり、令和 5 年度は、100 名を超える在籍があった。入院期間は 1 カ月未満から数ヶ月で、中には 1 年以上の入院となる児童生徒もいる。教員は、小学部 6 名、中学部 9 名、非常勤 2 名、養護教諭 1 名、養護助教諭 1 名の 19 名が配置されている。分教室歌の歌詞の通り、「笑顔を取り戻す」ために、本分教室は、運動会や学習発表会、持久走大会などの学校行事や、少人数での学習や、小・中学部の教員が横断的に行う教科学習、クラブ活動、自立活動など分教室教員の総力を結集した教育活動を展開している。

分教室歌　～真実の翼～
作詞　中野光章　　作曲　覚野和華

笑顔取り戻すために
誰かが決めた勝ち負け捨てて
現実と優しさ握りしめ
目の前のこの道を歩き出そう
伝えられない思いが　いつか翼になったなら
本当の居場所を　見つけだしたい
泣いてもいいよ　みんな一人じゃない
遠く離れていても
見守ってくれる人がきっといるから
わかってもらえない悔しさが
言葉になったなら
いつかほんとの居場所に
たどり着けるから

R4 在籍児童生徒の前籍校の地域

市町村	小学生	中学生	合計	市町村	合計	府外	合計
①枚方市	10	5	15	八尾市	2	京都市	1
②大阪市	5	5	10	四條畷市	2	八幡市	1
寝屋川市	6	4	10	池田市	2	宝塚市	1
④交野市	3	5	8	岬町	2	奈良市	1
⑤堺市	0	5	5	門真市	1		
東大阪市	1	4	5	守口市	1		
高槻市	4	1	5	高石市	1		
⑧吹田市	3	1	4	箕面市	1		
豊中市	2	2	4	大東市	1		
⑩摂津市	1	2	3	富田林市	1		
茨木市	3	0	3	島本町	1		
柏原市	3	0	3	河内長野市	1	泉南市	1

令和 4 年度に在籍していた児童生徒の地域校については、大阪府のほぼすべての市町村からの転入や他府県からの転入もあった。そのため、多くの地域・学校と連携を行ってきた。

右図の右端に見えるのが病棟で、分教室は病院とは別棟となっている。

児童生徒は病棟スタッフに連れられて学校に登校してくる。小学生は本館、中学生は令和 4 年 4 月に完成した別館で授業を行っている。病棟の体育館や調理室、運動場（青空広場）も利用させていただいている。

病棟調理室

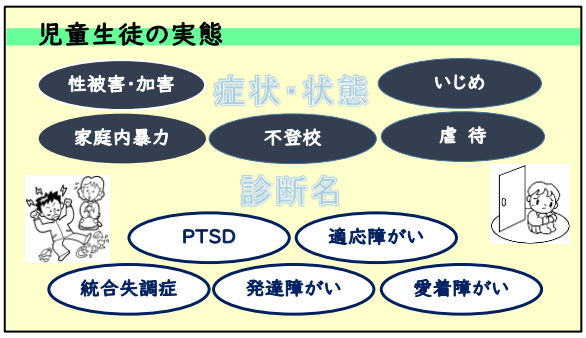
青空ひろば

体育館

(2)児童生徒の実態

児童生徒の実態としては、ほぼ全ての児童生徒に発達障がいの診断がついていたり、またその特性がみられたりした。地域校を不登校になっている児童生徒も多かった。小学生においては半数が子ども家庭センターの判断による措置入院で、これまでの養育の問題による愛着の課題も根深い。ここ数年では、ゲーム依存の児童生徒も多い。性加害や被害歴があったり、地域校でいじめを受けたり、家庭内で暴れるなど、さまざまな背景を背負った児童生徒が入院している。

困難を抱えた児童生徒は、家庭や学校生活の中での生きにくさや学びにくさを抱えている。その多くの特徴として、認知機能・感情統制の弱さや、融通の利かなさ、不適切な自己評価、対人スキルの乏しさが挙げられる。



- キレやすい、すぐに暴力をする
- 忘れ物が多く注意力が低い
- 強いこだわり（切り替えが苦手）
- 自制心や自尊心が低い（自分なんて必要のない人間）
- 偏った解釈（目が合っただけでにらまれた）
- 感覚過敏（些細な音に敏感、香水などの匂いが苦手）
- 強迫観念
- 人の気持ちが読み取れない
- 暴言や不快にさせる言動をとる

生きにくさを抱えている児童生徒

(3)授業体制

授業は 6 時間授業で、1 コマ小学部 45 分、中学部 50 分である。小学部では、1 ～3 時間目は 50 分授業で、小中学部ともに休み時間の設定はない。授業内で授業担当者の判断でトイレ休憩やゆっくりする時間を設けている。

病棟で昼食をとる。13 時からの自立活動の時間「わにタイム」は、小中学生が一緒に遊ぶ授業である。入院当初は短い登校時間を設定し、児童生徒と担任とで相談しながら登校時間を増やしていく。

分教室　校時表

小学部		中学部
8:50～9:40（50分）	1限	8:50～9:40（50分）
9:40～10:30（50分）	2限	9:40～10:30（50分）
10:30～11:20（50分）	3限	10:30～11:20（50分）
11:20～12:05（45分）	4限	11:20～12:10（50分）
12:05～13:00（55分）	昼食時間	12:10～13:00（50分）
13:00～13:30（30分）	わにタイム	13:00～13:25（25分）
13:30～14:15（45分）	5限	13:25～14:15（50分）
14:15～15:00（45分）	6限	14:15～15:05（50分）

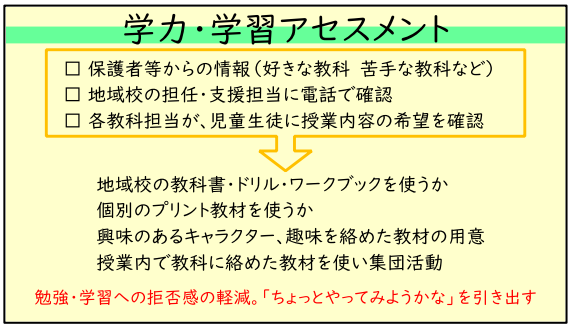
授業体制は、中学部だけでなく小学部も教科担当制で、中学部の教員が小学部の授業を主担で実施する教科もある。授業グループは、小学部は学年別に展開し、中学部は学年別と支援級的なクラスである「合同」クラスの計 4 展開している。毎週木曜日に全職員が集まる部会を行い児童生徒の情報を共有している。

授業体制

小学部（6名）		中学部（9名）
1・2年担当　2名、3・4年担当　2名 5・6年担当　2名 ★1限「算国プリント・読書など」のみ輪番で担当 ★音、体は、中学部教員が担当 ★図は非常勤教員と他部署教員が担当 ★3・4・5・6年「理・英」は中学部教員・他部署教員が担当 ★5・6年「社会」は中学部教員が担当 ★5・6年「総合」は小免保持の中学部教員が担当	教科担当制	国　数　英　理　社　音　体は、常勤教員が担当 ★美（非常勤）　社1・2年（非常勤）
各学年展開。 教科によっては隣接学年と合同	学年展開	1・2・3・合同（支援級）の4展開

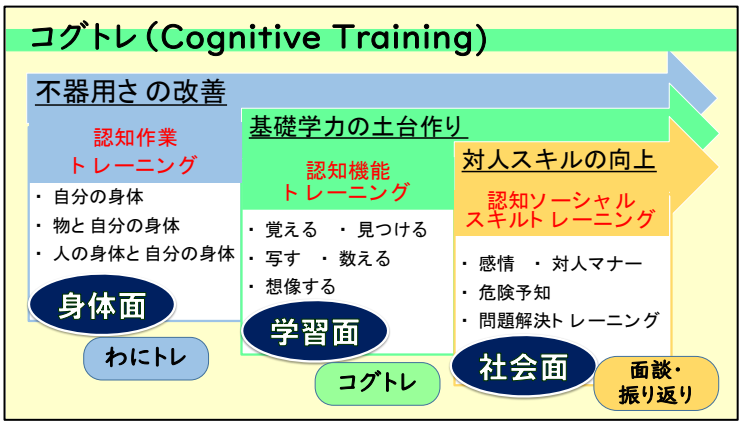
毎週木曜日に、全職員で『部会』を実施。
児童生徒の情報を共有。

分教室の学習については、主治医からの発達検査の情報や、保護者や地域校の教員などの学習状況、各教科の教員が児童生徒にこれまでの学習内容を確認し、指導内容を決定している。地域校の教科書やドリルを使うこともあれば、これまでの学習内容を考慮し、個別にプリント教材を用意することが多い。授業に少しでも意欲がでるように児童生徒の好きなキャラクターや趣味を絡めた教材を用意することもある。少人数での学習にはなるが、授業内で教科に絡めたカードゲームなどを使い集団活動も取り入れている。学習への拒否感の軽減を図り、少しでもやってもみようとする意欲を引き出せるように工夫している。



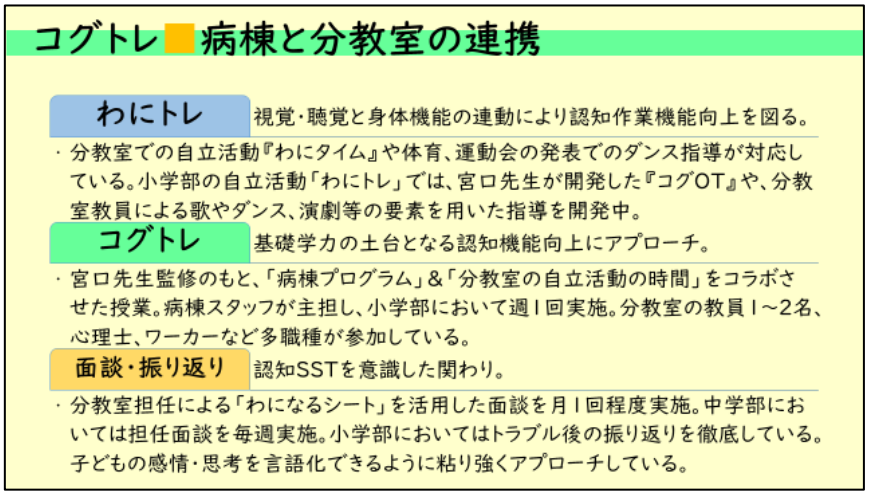
(4)病棟と連携した自立活動

『コグトレ』は立命館大学教授宮口幸治先生が、少年院の子どもの多くの特徴として、認知機能・感情統制の弱さや、融通の利かなさ、不適切な自己評価、対人スキルの乏しさ、身体的不器用さをあげていた。そこで、学習面、社会面、身体面へのアプローチが必要と考え、コグトレの開発に至った。不器用さの改善をめざした認知作業トレーニング、基礎学力の土台作りをめざした認知機能トレーニング、対人スキルの向上をめざした認知ソーシャルスキルトレーニングの 3 分野のトレーニングから構成されている。そして、『コグトレ』の理論をベースに、令和 2 年度からは身体面・学習面・社会面の 3 分野を病棟と分教室が連携して取り組む体制を整えている。



まず、わにトレは、視覚・聴覚と身体機能の連動により認知作業機能の向上をめざしている。分教室での自立活動『わにタイム』や体育、運動会の発表でのダンス指導がそれに対応している。小学部の、自立活動・道徳・総合的な学習を合科させた授業「わにトレ」では、宮口先生が開発した『コグ OT』や、分教室教員による歌やダンス、演劇等の要素を用いた指導を今年度から週 1 回 45 分実施している。

次は認知機能の向上をめざしたコグトレである。大阪精神医療センターでは、小学生向けに治療プログラムとして『コグトレ』の活用を始めていた。宮口先生は以前、大阪精神医療センターの医師だったこともあり、宮口先生による病院での研修会が開催された際に分教室教員も参加した。



令和元年度からは、病棟プログラムと分教室の自立活動の授業をコラボさせて、病棟スタッフが授業主担者となり、小学生を対象に週 1 回 45 分、実施している。令和 4 年度からは毎朝 1 時間目に、コグトレのプリントに取り組む時間（5 分）を設けている。これは、コグトレの練習として児童には伝え、反復することで慣れてくると拒否感が軽減されると思われたからだ。そこで、前向きな気持ちが出るように、教員に相談できる雰囲気や楽しみながら取り組めるように声掛けをしている。

面談や振り返りを通して、認知ソーシャルスキルトレーニングを行っている。分教室が開発した「わになるシート」を活用した担任面談や、トラブル後の振り返りを徹底している。子どもの感情・思考を言語化できるように粘り強くアプローチしている。

2　分教室の役割

刀根山支援学校の教育方針をもとに、分教室としての役割を紹介する。

(1)「学ぶ意欲を引き出す」ために

教科担当制によって、各教科で学習のアセスメントを行い、児童生徒それぞれの学びの形を模索している。児童生徒が主体的に学習に取り組めるように、日々実践を重ねている。また、授業でのルールを明確にし、授業内容を視覚的に提示し、見通しを持ち安心して学習に取り組めるように配慮している。自己肯定感の低い児童生徒が多いため、入院中に好きなことや自信になるものを見つけて退院してほしいと願っている。そのため、絵を描く、歌を歌う、発表する、リーダー役をするなどの自己表現の場を、授業や行事等で設けている。

刀根山支援学校の教育方針

1 一人ひとりの「学ぶ意欲」を引き出し、「学ぶ楽しさ」を実感することで、治療に立ち向かう心を育てる。

2 病気療養中の児童生徒が、安心して安全に学ぶことで、自身の目標に向けて進もうとする意欲を育てる。

3 さまざまな人とのつながりを通して、自分も他者も大切な存在であることに気づき、お互いを認め合う心を育てる。

4 家庭・病院・関係機関との連携のもと、病弱教育への理解推進を図り、支援学校のセンター的機能を果たす専門性の向上に努める。

(2)「安心して安全に学ぶ」ために

本分教室では、安全を意識した学校運営を行っている。例えば、教員が学習で使用する物品についての管理を徹底して行っている。ハサミなどの危険物使用の際には、職員室で複数名の教員で数を確認し記録している。使用後も同様の手順で決まった場所に収納している。ホッチキスの芯やクリップ、輪ゴムなど小さな文房具であっても、児童生徒が病棟に持ち帰り自傷するための道具として使用してしまわないように、職員室外には持ち出さないなど注意をしている。また、病棟と情報を共有し、服薬状況や感染症の流行状況などを確認しながら児童生徒の体調管理を行っている。

そして、教員も毎日の健康観察を徹底し、感染症の疑いのある症状がある時には、出勤せず、管理職等と相談し必要に応じて医療機関の受診を行うようにしている。病棟で実施しているインフルエンザ予防ワクチン接種では、本分教室の教員も任意で接種を行っている。

(3)「自分も他者も大切な存在であることを気づく」ために

分教室においては、「ノータッチ」を合言葉に不用意に児童生徒同士が体に触れないように、病棟と同じルールで指導している。教員も同様に、安全確保の目的以外では児童生徒の体には触れないようにしている。そのため、教員の積極的な言葉がけにより、児童生徒への気持ちを伝えるようにしている。また、児童生徒から暴言や暴力があった場合には、病棟の自室に戻ってもらい、教員が病棟の自室まで行って振り返りをしている。その行為

に至ったことを振り返り、よくなかったことが何か、他の対処法や表現方法はないのかなど話し合う。児童生徒によっては、何度も繰り返すことがあるが粘り強く行うことで、児童生徒の言語化する力は上がり、自分の気持ちに気づき表現できるようになっていく。

中学生においては毎週１回、小学生においては必要に応じて、担任との面談を実施している。10～30 分の時間で、登校時間数の確認や困りごと、不安なことなどを聞き取っている。児童生徒が教員とじっくり話す機会になり、児童生徒が「自分」もしくは「個」を意識する時間として分教室としては重視している。児童生徒が、時には涙を流し、時には拒否したり、逆に普段話さないような話題が出てきたり、児童生徒と担任がしっかり向き合う時間となっている。学習場面での成長した話を担任がすると、児童生徒の反応として、初めは受け止められず照れた様子でさえも出せないことも多い。それでも、児童生徒には届くと信じて誉める事を続けている。

(4)「支援学校としてのセンター的機能」

①講演・研修会での発信

本分教室では、自立活動の実践研究や、これまでの分教室運営において出会ってきた地域の小・中・支援学校、保護者、元入院児童生徒、国立特別支援教育総合研究所、大学、枚方市教育委員会、児童養護施設、児童心理治療施設、全国の病弱支援学校などと連携を深めることにより、ネットワークを構築することができた。また、定期的に大阪精神医療センターの医師や心理士、保育士、看護師等からの専門的な研修を受ける機会にも恵まれている。

研究研修活動

- □羽曳野支援学校 阪南病院分教室との連携
- □他府県病弱支援学校 訪問交流
- □枚方市教育委員会主催 教員研修会への参加
- □全国病弱教育連絡協議会研究発表大会での発表
  - R1「病棟と連携した性に関する指導」
  - R3「自立活動 コグトレをベースにした自立活動」
- □児童心理治療施設 併設の分教室訪問
- □『わになるシート』活用希望の学校との連携

そのため、支援学校のセンター的機能として、本分教室が蓄積してきたこれまでの研究成果や専門的知識について、地域の小学校・中学校・高等学校・支援学校からの依頼や、市町村教育委員会からの依頼で講演や研修会など、大阪府だけでなく全国各地で行ってきた。今後も、地域校からご依頼があれば足を運び、お力になっていきたい。

②『Co-MaMe』と『わになるシート』によるアセスメントの紹介

本分教室は、国立特別支援教育総合研究所（以下、「特総研」）の基幹研究「精神疾患及び心身症のある児童生徒の教育的支援・配慮に関する研究」の研究協力校として平成 29～30 年度にかけ、この研究に参加した。

これを機会に、特総研の今回の研究成果である「Co-MaMe（連続性のある多相的多階層支援）」を通して、実践研究を行ってきた埼玉県立けやき特別支援学校 伊奈分校が開発した『自分メーター』という尺度表を参考に、平成 30 年より大阪府立羽曳野支援学校　阪南病院分教室と合同研究を始めた。

本分教室では、児童生徒の集中力を考慮して項目数を減らし、わかりやすい表現にする等改編し、支援者が輪になって支えることをイメージして命名した『わになるシート』を平成 31 年 2 月に完成させた。また、『わになるシート』を使った面談の結果を個別の教育支援計画とリンクさせることにした。

令和 5 年度に入り、地域校から児童生徒のアセスメント方法に関する問い合わせが増えてきた。そのため、お招きいただいた学校において『Co-MaMe』と『わになるシート』を活用したアセスメント方法を提案させていただいている。本誌では、『わになるシート』の活

用方法のみを記載する。

『わになるシート』の活用方法　（次ページ「わになるシート」）

『わになるシート』（以下、W シート）は 6 つの項目と 37 の質問から構成されている。Co-MaMe に裏付けされた項目構成であり、自立活動の観点に共通する内容である。回答はそれぞれ 5 段階の尺度になっている。

W シートを使用した面談により、児童生徒の課題がわかるだけではなく、児童生徒のストレングス（強み）も見つけ出すことができる。児童生徒本人が気づけていない課題やストレングスを教員が伝えることも重要である。また、教員がチームで児童生徒の指導支援をするために、W シートで得られた情報は会議等で他の教員と共有している。

『わになるシート』取り扱い方法（注意点）

- 児童生徒と担任が面談を実施するときに使用する。
- 5段階で数字をつけるが、その数字をつけた理由を、児童生徒に質問しながら行う。数字をつけることが主目的ではなく、あくまでも児童生徒との関係づくりや児童生徒の言葉を引き出すことを大切にしている。そのため備考欄があり、その時の発言や様子を記録できるようにした。
- 教員のつけた評価は、児童生徒の状況に合わせて、開示の有無を判断する。
- 分教室に通学開始後 1 か月をめどに実施。2 回目以降は、児童生徒には前回の自己評価（数字）を見せずに実施している。入院期間にもよるが、学期に 1 回程度をめやすに児童生徒の変化（成長）を見据えて実施し、分教室での目標（個別の教育支援計画）を設定していく。
- 質問内容を読んで理解できない児童生徒には、担任がわかりやすい言葉に変えたり、質問数が多く集中力が続かない児童には、何回かに分けたり工夫をしている。

(5)退院後の復学・新しい環境での学習に向けて

退院後の生活をどうしていくか、入院生活や本分教室での学習の様子、配慮すること、成長したことを、保護者や地域の学校、関係者と情報を共有する必要がある。そのため、主治医が主催し、ケースカンファレンスが開催される。退院予定の児童生徒においてほぼ全員を対象に実施される。

退院後の復学・新しい環境での学習に向けて

～地域校への学習・支援・指導の引き継ぎ～

- 分教室での支援指導を活かす。
- 地域校の実情に合わせた支援指導を取り入れる。

ケースカンファレンスへの参加
R3年度　126回（小91回、中35回）

地域校の教員の分教室での授業の様子を見学してもらう
外泊中に地域校に通う練習をする（交流学習）
学校間での引き継ぎのための会議を行う（リモートも含む）
個別の教育支援計画・指導計画の作成

子どもの成長した姿を共有し、地域校の不安の軽減。
地域校での受け入れ体制を検討してもらう。

地域校においては、復学や受け入れについての準備のために、分教室の把握した情報をできるだけ詳細にお伝えし、その参考になればと思っている。例えば、分教室での学習の様子を見学してもらったり、児童生徒が外泊中に地域校に通う練習（交流学習）を実施したり、分教室と地域校での会議をリモート等も含めて実施している。地域校の学習環境に適応できるように、地域校での準備している過ごし方や、交流学習での様子などを地域校からお聞きしている。そして分教室での授業での取り組みを工夫したり担任の面談で児童生徒の気持ちを確認したり、児童生徒がスムーズに地域校へ登校できるように支援している。

わになるシート

わたし・ぼくの目標

なまえ

←尺度表→

自活項目			項　目	5	4	3	2	1	月　日 受容期 転入当初 本人	月　日 受容期 転入当初 担任	月　日 試行葛藤期 本人	月　日 試行葛藤期 担任	月　日 安定期 退院前 本人	月　日 安定期 退院前 担任	面談時の様子 子どもの言葉
コミュニケーション	がくしゅう	1	先生の言っていることや指示がわかります。	わかる	少しわかる	どちらともいえない	あまりわからない	わからない							
コミュニケーション		2	黒板をノートに写すことができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
コミュニケーション		3	授業を、45分間、座って受けることができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
心理的な安定		4	苦手な教科でもがんばろうと思っています。	そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない							
	集計								0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
コミュニケーション	せいかつ	1	学校の連絡や、人の話を聞くことができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
コミュニケーション		2	見通しを持って計画的に行動ができます。(何をしたらいいのかわかります)	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
コミュニケーション		3	予定が変更されても平気です。	平気	少し平気	どちらともいえない	少しいや	いや							
環境の把握		4	忘れ物をしません。	しない	あまりしない	どちらともいえない	少しする	する							
環境の把握		5	物をなくすことはありません。	ない	あまりない	どちらともいえない	少しある	ある							
環境の把握		6	片付けができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
心理的な安定		7	学校の相談室や保健室をつかうことができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
心理的な安定		8	家には自分にとっての安心できる場所があります。	ある	少しある	どちらともいえない	あまりない	ない							
	集計								0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
健康の保持	みのまわり	1	朝、学校に間に合うように起きることができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
健康の保持		2	睡眠をとっています。	とっている	少しとっている	どちらともいえない	あまりとれていない	とれていない							
健康の保持		3	食事は三食とっています。	とっている	少しとっている	どちらともいえない	あまりとれていない	とれていない							
健康の保持		4	身だしなみ(洗顔・歯みがき・入浴・洗髪など)に気をつけることができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
心理的な安定		5	気持ちの支えになる存在や物があります。(　　)	ある	少しある	どちらともいえない	あまりない	ない							
	集計								0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
身体の動き	からだ	1	手先が器用だと思います。	そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない							
身体の動き		2	テキパキと行動できます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
身体の動き		3	運動が好きです。	好き	少し好き	どちらともいえない	少し嫌い	嫌い							
環境の把握		4	匂いが気になって、困ったりつらくなったりすることがあります。	ない	あまりない	どちらともいえない	少しある	ある							
環境の把握		5	音や声が気になって、困ったりつらくなったりすることがあります。	ない	あまりない	どちらともいえない	少しある	ある							
環境の把握		6	光(明るさやまぶしさ)が気になって、困ったりつらくなったりすることがあります。	ない	あまりない	どちらともいえない	少しある	ある							
環境の把握		7	物や服の感触が気になって、困ったりつらくなったりすることがあります。	ない	あまりない	どちらともいえない	少しある	ある							
	集計								0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
人間関係の形成	しゃかい	1	みんなといっしょに勉強したり遊んだりできます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
人間関係の形成		2	友だちとけんかや言い合いをしません。	しない	少ししない	どちらともいえない	少しする	する							
人間関係の形成		3	異性の友だち(男子は女子、女子は男子)とルールを守って仲良くできます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
人間関係の形成		4	困ったときに話せる友だちがいます。	いる	少しいる	どちらともいえない	あまりいない	いない							
人間関係の形成		5	困ったときに話せる先生がいます。	いる	少しいる	どちらともいえない	あまりいない	いない							
人間関係の形成		6	表情や態度を見て、相手の気持ちがわかります。	わかる	少しわかる	どちらともいえない	あまりわからない	わからない							
	集計								0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
心理的な安定	こころ	1	不安や悩みがあります。	まったくない	あまりない	どちらともいえない	少しある	ある							
心理的な安定		2	自分の気持ちをコントロールすることができます。(イライラしても気持ちをおさえられます)	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
環境の把握		3	気になることがあっても、気持ちを切りかえてやるべきことができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
心理的な安定		4	がんばろうと思う気持ちがあります。	ある	少しある	どちらともいえない	あまりない	ない							
心理的な安定		5	少しのことでテンションが上がったり、下がったりすることはなく、落ち着くことができます。	できる	少しできる	どちらともいえない	あまりできない	できない							
心理的な安定		6	自分のことを大切に思います。または、自信を持てることがあります。	ある	少しある	どちらともいえない	あまりない	ない							
人間関係の形成		7	他の人のことを大切に思います。	そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない							
	集計								0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	

３　最後に

本分教室と地域校の学習環境は全く違い、本分教室の実践をそのまま地域校に当てはめて実践できるものではないと思う。医療と緊密に連携し、「小さな学校」としての本分教室の利点を活かした学習環境は、かなり特殊なのかもしれない。その中で「成長したな」「変われたな」「新しい自分に出会ったな」と自信を持ち笑顔を取り戻した児童生徒が、地域で活躍するためには何が必要なのか分教室からの視点では限界があった。

そこで、今年度の実践報告集において、本分教室の授業実践を余すことなく紹介し発信しようと思い至った。「小さな学校」での日々の授業での失敗の連続の末にある現状での最適解の授業を、各教科の教員が執筆した。ぜひ、読者の方には興味関心のある教科を、ご一読いただきたい。そして、地域校での実践に活かせるものがあれば、ぜひ教えていただければ幸いである。本分教室と地域校が様々な面で繋がることで、どんなことが起こるかその先は楽しみだ。

今後も、本分教室が研究や研修などを通じて蓄積してきた専門性を、地域支援として少しでも地域の学校関係者等に役立てていただきたいという強い思いを抱きつつ、目の前の児童生徒の笑顔のために、汗と恥をかき続ける覚悟だ。「小さな学校」の挑戦は続く。

『病弱教育の輪が、子どもの笑顔を取り戻し、未来につながる力になることを願って、いっしょにねばり強く』